

87 大善寺玉垂宮関係の文化財

所在地：久留米市大善寺町宮本 1463-1

アクセス：西鉄電車天神大牟田線大善寺駅下車徒歩 5 分

大善寺町の玉垂宮は天武年間^{てんむ}の創建と伝わり、高良山玉垂宮と共に筑後・肥前地域に宗教圏を広げた玉垂命信仰の中心地の一つでした。また『吉山家旧記』などによれば、天武天皇元年^{てんむてんのう} (672) には僧安泰が玉垂宮の傍らに高法寺を開き、以後神仏習合の社として繁栄し、平安時代末期には三瀧荘の中心地として、豊かな歴史を築いてきました。

寺伝では、盛時には 3,000 町の領地と 45 坊を有したといえます。戦国期から近世初頭には衰退しましたが、田中吉政によって「300 石」が寄進され、その後の有馬氏によっても同様の保護が与えられました。明治の神仏分離令^{しんぶつぶんりれい}によって大善寺が廃止されたために、多くの宝物や古文書が散逸しましたが、大善寺玉垂宮やゆかりの家々によってその歴史の一端を物語る資料が保存され続けており、久留米の中でも、中世までさかのぼる資料がまとまって伝来するという地域の特徴ともなっています。今日、その一部が国・市の指定を受けています。

なお、玉垂宮文書・御船家文書・隈家文書・梅津家文書は、それぞれ保存された由来などは異なりますが、いずれも大善寺と玉垂宮の歴史的な資料として、一緒に指定されたものです。



現在の玉垂宮



縁起図

けんぽんちやくしよくたまたれぐうえん ぎ
87-1 絹本 著 色 玉垂宮縁起

種 別：重要文化財 絵画（明治44年4月17日国指定）

縁起とは、その図絵を見せながら、その神社などの由来・神徳を解説し、人々に信仰を広めようとするものです。この大善寺玉垂宮の縁起は2幅対となっており、1幅には祭神とされる神功皇后じんぐうこうごうの、いわゆる「朝鮮半島出兵の物語」が描かれています。一方には、神仏習合時代の玉垂宮繁栄のさまが描かれており、上方に玉垂宮と神宮寺である大善寺、下方に高三瀦廟



境内図

院や大川酒見社等が描かれています。

絵には図式的な描写や、稚拙な点もあるなど、専門の画家の作ではないと見えます。木箱に製作の由来が記されており、これによれば、創建時からの縁起が年とともに破損したので、室町時代初期の建徳元年(1370)に新しく作成したものであり、作者は神社関係者である権律師永快とされています。現在は、京都国立博物館に寄託されています。

87-2 ^{だいぜん じ たまたれぐうもんじょ}大善寺玉垂宮文書

種 別：有形文化財 古文書（平成 10 年 7 月 29 日 市指定）

玉垂宮で保存されてきた 20 点の文書です。古いものでは鎌倉時代の三瀧荘の総鎮守社としての祭祀を示す文書があります。さらに、戦国期の豊後大友氏家臣団からの禁制・^{ほつと}法度類の文書、田中吉政からの寄進状、江戸時代の大善寺と江戸の^{とうえいざんかんえいじ}東叡山寛永寺との本末関係を示す文書、そして、明治以降の近代の寺社政策のあり方と玉垂宮の動きを伝える文書からなっています。

87-3 ^{みふねけもんじょ}御船家文書

種 別：有形文化財 古文書（平成 10 年 7 月 29 日 市指定）

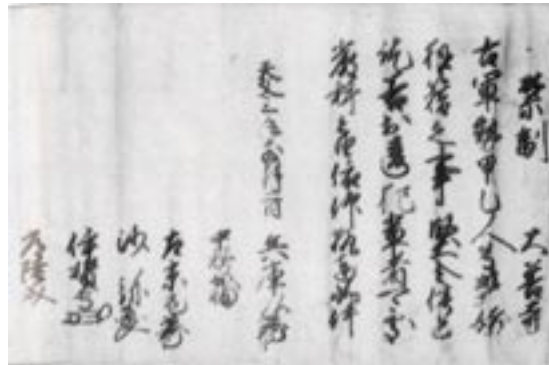
大善寺の第 14 世座主として、^{かえい}嘉永 6 年 (1853) に東叡山から派遣された伝俊（大村藩士中嶋氏の三男、比叡山修行時の師は後の高良山^{ごうりやま}座主亮恩）は、明治 2 年 (1869) の神仏分離によって還俗し、姓名を御船新と称し、玉垂宮の神職となります。

大善寺本坊の文書の多くは神仏分離により散逸したようですが、この御船家にその一部が伝えられて今日に及びました。文書は^{じょうきゅう}承久元年 (1219) を上限とする中世文書・近世文書、及び明治以降の御船家となってからの文書とに分類されます。

中世のものでは、三瀧荘の人々の奉仕内容を伝える「玉垂宮并大善寺仏神事次第」や、確認されるなかでは最も古い時期の「高良玉垂宮縁起」などが注目されます。近世文書は、少ないながらも実態が不明であった江戸時代の大善寺の姿を垣間見ることができます。さらに、近代文書は宮本洋学校開設のために、庫裏・敷地を寄付した経緯を知ることができます。



大善寺玉垂宮文書
(田中吉政寄進状)



御船家文書
(兵庫頭 中務少輔外連署禁制)



御船家文書 (高良玉垂宮神仏事本定額并新供僧番帳)

87-4 隈家文書

種 別：有形文化財 古文書（平成10年7月29日市指定）

隈家は大善寺玉垂宮の有力神官である大祝職を世襲してきた家で、その歴史は、少なくとも鎌倉時代後半期までさかのぼります。文書は、この隈家の戦国期までの在地土豪としての側面を伝えるものと、主として近世以降の大善寺玉垂宮の大祝職としての文書から成っています。また、旧高良山座主坊文書が一部含まれます。中世文書では、最も古い応永25年(1418)の「法恩寺寺領坪付」は当時の土地利用が理解され、また「久留目屋敷」という、早い段階での久留米の名を見る事ができる資料ともなっています。戦国期の太友氏・龍造寺氏からの書状は、佐賀と豊後の有力戦国大名との間で揺れ動いたこの地域の歴史の有様を良く物語っています。

近世文書の中では、幾度かの断絶はあるものの宝永2年(1705)から明治2年(1869)まで書き続けられた神社記録「社法日記」・「社法日次簿」は藩からの御達や藩への願書、日々の出来事などが細やかに記されており、その他の一群の近世文書と共に、久留米藩の社家社会や大善寺地域研究のための優れた資料となっています。



87-5 梅津家文書

種 別：有形文化財 古文書（平成10年7月29日市指定）

この文書は、美麗太夫・梅津家に伝わったもので、従来から中世芸能資料として著名なものでした。伝承などによれば、同家は菅原道真と共に九州に下向し、後に大善寺夜明村に移り三橋姓を名乗ったといいます。

また、源頼朝の前で見事に田楽を勤めた功で、九州田楽支配を許され、美男であった事により「美麗」の称を得たといいます。伝承は別としても同家は、中世を通じて、^{かわきたしょう}河北荘・^{みづま}三瀧荘・^{あじさか}鯨坂荘（現小郡市辺）等の荘官・領主の保護のもとに荘園内の神社へ田楽を奉仕し続けてきました。

荘園解体後も、戦国大名大友氏から田中氏に至る歴代領主の保護を得てきました。その後江戸時代には梅津姓を名乗り、夜明村の本家が^{まつばやし}松囃子・能をもって有馬氏に仕えてきました。

指定された文書は、梅津本家から、将来への保存のために玉垂宮が戦前に譲渡を受けたもので、2巻に装丁されています。「獅子勾当職安堵状」・「田楽法師補任状」等の、梅津家の田楽舞奉仕を示す文書群で、この地域の中世芸能史に関する根本的な資料です。





だいぜん じ たまたれぐう おによ
87-6 大善寺玉垂宮の鬼夜

種 別：重要無形民俗文化財（平成 6 年 12 月 13 日 国指定）

毎年正月 7 日におこなわれている追儺の行事で、日本三大火祭りの一つに数えられ、大勢の見物人を集めています。平成 6 年 12 月 13 日には国の重要無形民俗文化財に指定されています。

地元に残る「吉山旧記」によると、仁徳天皇 56 年 (368) 1 月 7 日勅命を受けた藤大臣が、肥前国の桃桜沈輪という悪党を、秘策を用いて討ち取り、その首を焼却したことが始まりとあります。祭りは、昼の鬼面尊神の神事と種蒔き神事や夜の大松明廻し、鉾面神事及び鬼堂回りなどの神事からなります。鉾面神事は、悪党退治の様子を再現するものです。これは世襲の家が務める行事で、介添役の若者が鬼の面を被った 2 人から、それが持つ鉾を奪い取り「ほこつた」、被った面を奪い取る「めんとつた」、この 2 名が腰にさした刀を抜く「そらぬいだ」の 3 つの場面から成ります。

その後に行われる大松明廻しで、祭りはクライマックスを迎えます。氏子より奉納された直径約 1 m、全長約 13 m の 6 本の大松明が、大勢のしめこみ 1 本の氏子によって支えられ、火の粉を散らしながら勇壮に本殿の

周りを2度廻ります。この間、鬼役は人目に付かないよう姿を隠しながら、鬼堂を7回半回ります。

やがて1番大松明は汐井場^{しおい}に向かい、赫熊^{しやくま}の子供にかくまわれた鬼は、「みそぎ」をおこない、神殿に帰りつくと巨鐘が打たれ、大松明は消え、祭りは興奮の余韻の中静かに終わります。



87-7 大善寺玉垂宮の石造鳥居

種 別：有形文化財 建造物（平成 19 年 8 月 20 日県指定）

玉垂宮の表参道に立つ鳥居です。柱、貫、笠木、島木が一体で、それぞれと三本継で肥前型の様式をしめしますが、笠木の様式は明神系のもので、台輪は柱上に作り出されています。なお、額束は失われています。

この鳥居は元は一の鳥居であり、傘橋の南詰の町内にありましたが、昭和 9 年（1934）に花崗岩製の鳥居が新設された際に現在地に移されました。

この鳥居の笠木については根岸栄隆氏の「鳥居の研究」（昭和 18 年刊）において、鳥居の倒壊により笠木が壊れたため、笠木を境内裏口の明和 8 年（1771）銘の肥前鳥居に移し、この鳥居には新たに明神系のものを設置したという推測がされています。

銘文としては向かって右柱に、「国主田中筑後守橘朝臣忠政」、左柱には「筑後国三瀨郡下荒木村願主田河七郎左衛門尉、同苗口左衛門尉」と「元和四季仲春日」の銘があることから、元和 4 年（1618）の造立であることが分かります。

この鳥居は、久留米市内では県指定である慶長 12 年（1607）の北野天満宮の石造鳥居につぐ古さを持つもので、建立以来 390 年余を経ており貴重な資料です。大善寺玉垂宮には筑後国主となった田中吉政が慶長 6 年に寺領 300 石、慶長 9 年には鐘を寄進するなど、手厚い保護を与えています。また、二代藩主忠政による鳥居の寄進は、神社への保護を具体的に示すとともに、田中家の筑後支配にとって神社が重要な位置を占めていることを示す資料としても貴重であると言えます。





だいぜん じきゅうくり
88 大善寺 旧庫裡

種 別：有形文化財 建造物（昭和 58 年 6 月 24 日 市指定）

所 在 地：久留米市大善寺町宮本 1460-1

アクセス：西鉄バス「宮前」下車徒歩 1 分

西鉄天神大牟田線大善寺駅下車徒歩 5 分

大善寺は高良玉垂命（武内宿禰）を主神とする玉垂宮の神宮寺で、玉垂宮とあわせて「御船山^{みふねざん}大善寺玉垂宮」と呼ばれていました。寺伝では、天武元年（672）高法寺の名で創建されました。その後弘仁^{こうにん}5 年（814）に大善寺に改称されたと伝えられています。

そして、明治 2 年（1869）の神仏分離の際、玉垂宮と大善寺は分離され、玉垂宮のみを残して大善寺は廃止となりました。

明治 5 年、その大善寺の跡に開設されたのが宮本洋学校です。これは久留米洋学校と柳川洋学校を合併移転したもので、校舎はこの大善寺の建物の寄贈を受けて使用し、外国人教師として英国人宣教師ジョージ・オーエンを招いたことは有名な話です。宮本洋学校閉校後も、その建物は宮本小学校、宮本高等小学校等として利用されてきました。

このようにして使われてきた、大善寺庫裡の一部を現在地に移転復元したものが、現在の旧庫裡です。江戸時代末期に建築されたもので、規模も大きく、当時の大善寺を偲ぶことができる建物です。

89 朝日寺の文化財

所在地：久留米市大善寺町夜明 1095

アクセス：西鉄天神大牟田線 大善寺駅下車徒歩 10 分

朝日寺の伝説

夜明山朝日寺は、神子栄尊かんげん禪師が寛元 3 年 (1245) に開いた臨済宗の寺院です。神子いみな禪師は諱を口光、字を栄尊とといいます。伝記によれば栄尊の父は平康頼、母は筑後三潆庄の住人であった藤吉種継ふくろけんじゆくかんのんの娘です。栄尊の母は信仰に厚く、当地にあった不空絹索ふくろけんじゆくかん観音を信じていました。

栄尊けんきゆうは建久 5 年 (1194) 生れましたが、生まれた時、口から異光を放ったため、恐れを抱いた母が寺の近くに捨てたと伝えられています。栄尊は山本郡柳坂の永勝寺の嚴琳和尚に拾われ、将来その子を仏門に入れることを約束させ、再び母のもとに返されたといわれます。栄尊けんじんは建仁元年 (1201) に出家して、深く修行をおこない、宋に渡り無準和尚のもとに学んで帰国し、京都・関西地方を行脚した後、肥前国報恩寺・筑後国朝日寺、豊前国円通寺などの寺を開きました。



朝日寺境内



もくぞうしん し えいそん ざ ぞう
89-1 木造神子栄尊坐像

種 別：有形文化財 彫刻（昭和53年3月25日県指定）

ぎよくがん
玉眼入りの面貌、鎖骨が見える胸の一部や咽喉部分の描写など、鎌倉時
代ちんぞうの頂相（禅宗でいう師又は高僧の肖像）の写実様式をよく伝えており、胎
内かげんに嘉元2年（1304）の像造銘があります。像高は約110cm、松材の寄木
造りで体部は前・中・後の三材を縦にはぎ頭部を差し込んでいます。禅師
の面影を写実的によく伝え、作品としても歴史的にも高い評価がなされて
います。

89-2 ^{かんのんどう} 観音堂の仏様

種 別：有形文化財 彫刻（平成5年6月22日市指定）

筑後国33ヶ所霊場の第20番札所である、朝日寺の観音堂は、^{てんめい}天明3年（1783）の建立と考えられます。

この観音堂には、栄尊和尚の母が1,000日のはだし参りをしたといわれる不空縋索観音を中心に、3体の観音像が祀られています。3体とも鎌倉時代から南北朝の作品であり、久留米市の中世美術資料として貴重な作品です。

^{もくぞう ふくうけんじやくかんのんりゅうぞう} 木造不空縋索観音立像

観音堂の3体の像の中央に安置されています。制作年代は鎌倉時代末期から南北朝時代のものと考えられます。材質不明の^{よせぎづくり}寄木造、^{しっぽく}彫眼、漆箔の像で像高は約220cmです。

^{もくぞうしょうかんのんりゅうぞう} 木造聖観音立像

正面に向って左に安置されています。左足を軽く踏み出し動きをあらわしています。これも鎌倉時代末から南北朝時代の制作と思われます。桧材と思える寄木造、玉眼、漆箔の像で像高は約258cmです。

^{もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう} 木造十一面観音立像

正面に向って右に安置されています。制作は鎌倉時代中期と推定されています。材質不明の寄木造、玉眼、漆箔の像で像高は約236cmです。



木造不空絹索觀音立像



木造聖觀音立像



木造十一面觀音立像



ふじよしてんまんぐう　せきぞうこまいぬ
90 藤吉天満宮の石造狛犬

種別：有形民俗文化財（昭和49年11月1日市指定）

所在地：久留米市大善寺町藤吉810 藤吉天満宮内

アクセス：西鉄バス「若宮」下車徒歩5分

神社の社頭や参道に立つ狛犬は、中国の空想上の動物が起源といわれていますが、私達にはなじみの深いものです。

藤吉天満宮の石造狛犬は、^{あんざんがん}安山岩質の素材で、^{うんぎょう}吽形の方だけが残っています。大きさは体高47cm、幅24cm、奥行き33cmほどで、この種の狛犬としては大型なものになります。

顔面は体にくらべて大きく、平板的で角張り、長大な鼻すじと広い軍配形の鼻翼が特徴的です。重厚な中にも、大胆な省略と統合で狛犬が表現されており、肥前型前期の特徴を示しています。また背部に、「^{けいちょう}慶長十七年（1612）八月日敬白」の銘が残っています。

室町末から江戸中期にかけて、肥前石工の活躍はめざましいものがあり、狛犬をはじめ筑後地方に及ぼした影響は大きいといわれています。

付图 10

